

以下のサンプル問題は、一例として作成したものであり、実際の問題の難易度や形式、設問数を示すものではないことに留意してください。

1 新城市の小学校のみさきさん、ちはやさんの学級では、交流している他県の小学校とオンラインで交流を行うことになり、交流会に向けて、グループに分かれて他県の小学生に紹介したい「地域じまん」を考えることになりました。あとの問に答えなさい。

問1 次の、みさきさんが考えた原稿の [] にははまる内容について、下の①から⑦までをならび替えます。
①から⑦までをならび替える順番として最も適当なものを、あとのアからカまでのの中から選びなさい。

【みさきさんが考えた原稿】

この写真を見てください。これはさといもですが、普通のものよりも、丸くて大きいです。わたしは、「地域じまん」として、この新城市特産の「八名丸さといも」を紹介したい理由は、二つあります。

一つめは、
[]
二つめは、
[]

【写真】 八名丸さといも



以上の二つの理由から、わたしは「八名丸さといも」を「地域じまん」として紹介します。

- 最近では、「八名丸さといも」を使った「八名丸コロッケ」が、ご当地グルメとしてテレビや新聞でも紹介されています。
- なんといっても、普通のさといもと比べて味がいいからです。
- この地域で作られ始めた野菜だからです。
- さらに、食感がやわらかく、ねばり気があるのも特徴で、みそ汁に入れてもおいいです。
- しかし、2002年に「あいちの伝統野菜」に選定されたことで、ブランド化が進み、広く知られるようになりました。
- 1945年ごろから作られています、当時はあまり有名ではありませんでした。
- また、煮崩れしにくく、味がしっかりと染み込むので、煮物やおでんに最適です。

- ア 「一つめは、」→③→⑥→①→「二つめは、」→②→⑦→⑤→④
 イ 「一つめは、」→②→⑦→④→「二つめは、」→③→⑥→⑤→①
 ウ 「一つめは、」→②→⑥→⑤→「二つめは、」→③→①→④→⑦
 エ 「一つめは、」→③→⑦→④→「二つめは、」→②→①→⑤→⑥
 オ 「一つめは、」→③→④→①→「二つめは、」→②→⑦→⑥→⑤
 カ 「一つめは、」→②→①→⑦→「二つめは、」→③→⑥→④→⑤
- 【正答】
イ

国語 出題項目 乱文整序 受験明和による問題分析

出題内容・問われる学力

接続詞と、各文の内容をもとに7つの文の順番を決める問題

▼

備考

全体として、「八名丸さといも」を紹介したい理由」についての文章なので、「から」という理由の文末表現になっている2文がメインだと判断し、残りの5文を内容に基づきメイン2文のどちらに属するのかを判断していく。原稿の一部となる文章をつくるという大枠を意識するため、記号選択問題ならではの消去法的思考だけでは解きにくくなる。
選択肢問題なので気にする必要はないが、「また」と「さらに」の順番など、接続詞のはたらきを厳密に考える習慣はつけておくべき。

伸ばすべき力

- 基礎的な国語の知識
- 情報を正しく理解する読解力
- 情報を整理する力

▼

力の細分化

- 学校での基礎国語：接続詞のはたらきを理解する力
- 情報読解力の①「情報に対応する力」
・資料から与えられる新しい情報や初見の言葉に対して、文脈や名称からある程度の意味を類推する力。(後者は、日常でできることと言えば漢字1字ずつの意味を考える習慣)
- 情報読解力の②「情報を整理する力」
・近い内容や言いかただけの内容は、分類して把握する読み方。
・具体と抽象、上位語下位語の関係を把握する力。(今回で言えば「八名丸さといも」が広く知られるようになった」こと具体例が「テレビや新聞での紹介」という関係)

問2 みさきさんとちはやさんは、「八名丸さといも」を他県の小学生に紹介するため、実際に「八名丸さといも」を使って煮物を作り、みんなで食べてみることにしました。
煮物を作るために、二人はさといもを30個用意し、同時に皮をむき始めました。みさきさんが12個、ちはやさんが8個むき終えたのがちょうど同時で、かかった時間は12分でした。
その後も二人はいっしょに皮をむき続け、少し時間が経過したところで、ちはやさんは煮る準備をするために皮をむくのをやめ、残りのさといもは、みさきさんが一人で皮をむきました。
みさきさんとちはやさんが皮をむき始めてから、みさきさんがむき終わるまでにかかった時間が20分であったとき、みさきさんが一人で皮をむいていた時間として正しいものを、次のアからキまでのの中から選びなさい。
ただし、さといもの大きさや形は全て同じとし、二人がさといもの皮をむく速さはそれぞれ一定とします。

【正答】
オ

ア 1分 イ 2分 ウ 3分 エ 4分
オ 5分 カ 6分 キ 7分

問3 ちはやさんは、さといもの煮物をつくるために、鍋に水を入れて火にかけました。しばらくすると、水がふっとうし、水の中から大きなあわが出て、湯気が見えました。
この現象や水の温度と重さの関係について説明した次の文中の(A)、(B)、(C)のそれぞれにあてはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを、下のアからクまでのの中から選びなさい。

水がふっとうしているときに出てくる大きなあわは、水蒸気です。水蒸気が空気中で(A)液体の水になり、水の小さな粒として目に見えなくなったものが湯気です。水蒸気が湯気になることと同じような現象として、(B) ということがあげられます。また、同じ二つのコップに、60℃の水と10℃の水を、それぞれ同じ体積になるように入れて重さを量ると、(C)の水の方が重くなります。

	A	B	C
ア	あたためられて	冷やされて	60℃
イ	あたためられて	寒い日にまどの内側が結露する	60℃
ウ	あたためられて	冷やされて	10℃
エ	あたためられて	寒い日にまどの内側が結露する	10℃
オ	冷やされて	冷やされて	60℃
カ	冷やされて	寒い日にまどの内側が結露する	60℃
キ	冷やされて	冷やされて	10℃
ク	冷やされて	寒い日にまどの内側が結露する	10℃

【正答】
ク

算数 出題項目 速さ 受験明和による問題分析

出題内容・問われる学力

文章の情報をもとにした、仕事算(速さの一種)

▼

備考

「さといも1個の皮をむくのには何分かかると考えるのか、「1分でどれだけのさといもをむけるか」と考えるのか、そしてそれぞれの場合、「個数÷時間」なのか「時間÷個数」なのか、苦手な生徒はまずそこをまずきやすい。
やや鶴亀算のようにも見えるが、問題文を整理すれば楽な解き方は鶴亀算ではないので、ただ難しい特殊算を練習するのではなく、問題文中の情報を整理しながら式に落とし込んでいく運用力の方が重要。難関私立中学入試レベルの算数までは要らないが、学校の算数は完璧であるうえでその上に積み上げる練習量が求められる。

伸ばすべき力

- 基礎的な算数の知識・計算力
- 情報を正しく読み取る読解力
- 情報を整理する力

▼

力の細分化

- 学校での基礎算数：文章から式を立てる力(8個むくのに12分なら、10個むくのに何分か、という計算で瞬時に立式できる)
- 学校で扱うよりも長い問題文から数量関係を把握する力。
・人物が複数登場するので、それぞれの数字がどちらの情報か正しく理解する
- ・単純化する力(12個に12分なら1個に1分ということを理解する。「12個」と「12分」が少し離れたところに書いてあるが結び付けて理解する)

理科 出題項目 水の三態変化 受験明和による問題分析

出題内容・問われる学力

水の温度変化と状態変化

▼

備考

3か所の空欄に入る言葉を選ぶ問題だが、3か所をそれぞれ選ぶのではなく、3つの組み合わせとして正しいものを選ぶ問題なので、1つの知識がいまいたと50%の確率で間違えることになる。愛知県の公立高校入試でも見られる形式。
湯気は液体であり「水蒸気が湯気になる」ということが「気体から液体になる」ということだと理解していないと、水蒸気が水滴になる「結露」と同じだと考えられなくなる。日常の理学的現象に目を向けることは重要だが、それを厳密な定義や規則性に落とし込むことも必要といえる。

伸ばすべき力

- 基礎的な理科の知識
- 設問を正しく理解する読解力

▼

力の細分化

- 学校での基礎理科：厳密な知識理解(湯気は細かい水滴であり、液体。水蒸気とは別)
- 日常の現象を理学的に理解しようとする習慣「理学的視点」(結露の理解)

問4 みさきさんとちはやさんは、今回の「地域じまん」の発表をきっかけに、農業に興味をもち、日本の農業について調べることになりました。二人は、農林水産省のウェブページにあるデータをもとに【資料1】、【資料2】、【資料3】を作成し、話し合いをしました。話し合いの様子を示した【会話文】および【資料1】、【資料2】、【資料3】の内容から考えられることとして適切なものを、あとのアからオまでの中から二つ選びなさい。

【会話文】

みさきさん：【資料1】では、日本人の食生活が、1960年度から2020年度にかけて大きく変化したことを表にしたけど、米の消費量が減って、肉類や牛乳および乳製品の消費量が大きく増えているね。

ちはやさん：【資料2】では、日本の食料自給率の変化を表にしたけど、1960年度も、2020年度も、国内で食べられている米のほとんどは、国内で生産されているね。

みさきさん：農業をやっているおじいちゃんから聞いたんだけど、日本では1960年ごろから、米の生産量が消費量より多くなって、米が余るようになったんだって。そのために、1969年から、米の生産を減らす生産調整が行われて、多くの農家が転作をして、米以外の作物を作るようになったそうだよ。

ちはやさん：みさきさんのおじいちゃんのように、農業を主な仕事にしている人が1960年から2020年にかけて大きく減ったことや、そのうち60歳以上の人の割合がすごく増えていることをグラフにしたのが、【資料3】だよな。

みさきさん：私のおじいちゃんはまだまだ元気に畑に行っているよ。おじいちゃんは無農薬の野菜を育てていて、この前スーパーマーケットに行ったら、おじいちゃんの名前と顔写真のシールを貼った野菜が売られていたよ。

【資料1】食料品ごとの日本人一人1日当たりの消費量の変化

年度	米	小麦	肉類	牛乳および乳製品	野菜	果物
1960年度	314g	70g	14g	60g	273g	61g
2020年度	139g	87g	92g	258g	242g	93g

【資料2】日本の食料自給率^{※1}の変化

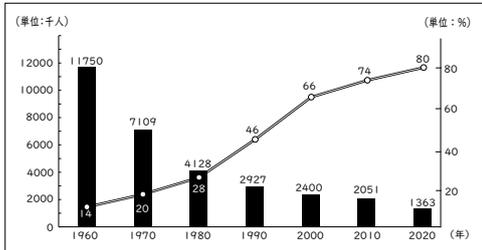
年度	食料品目別自給率 ^{※2}						総合食料自給率 ^{※3}
	米	小麦	肉類	牛乳および乳製品	野菜	果物	
1960年度	102%	39%	93%	89%	100%	100%	79%
2020年度	97%	15%	53%	61%	80%	38%	37%

※1 国内で食べられる食料に対する、自分の国で作られている食料の割合のこと。生産額、重量、熱量（カロリー）から計算する方法がある。

※2 重量から計算したもの。

※3 熱量（カロリー）から計算したもの。この値は、表の6品目の平均ではなく、全ての食料品目から計算している。

【資料3】農業を主な仕事にしている人の数と、そのうち60歳以上がしめる割合



※ 資料1、資料2、資料3は全て「2020年度 農林水産省 食料需給表」をもとに作成

- ア 1960年度から2020年度にかけて野菜の消費量が減ったのは、米の生産量を減らす生産調整が行われたことにもなっており、多くの農家が転作をしたことが原因である。
- イ 日本国内のスーパーマーケットで売られている野菜は、全て生産者の名前と顔がわかるようになっているため、消費者にとっての安全・安心が確保されている。
- ウ 総合食料自給率が約60年間で大きく低下したことは、食生活の変化によって消費量の増えた食料品目が輸入によってまかなわれてきたことを示している。
- エ 農業を主な仕事にしている人の数のうち、60歳以上がしめる割合が増えて高齢化は進んでいるが、農業を主な仕事にしている人の数は、全体としては減っていない。
- オ 2020年に60歳未満で農業を主な仕事にしている人の数は、1960年の約2.7%に過ぎないことから、食料を効率的に生産するためのくふうが必要になっている。

【正答】
ウ・オ

社会 | 出題項目 | 農業 (自給率と消費量の変化) | 受験明和による問題分析

出題内容・問われる学力

複数の資料を読み取り、適切な内容の選択肢を2つ選ぶ問題。

伸ばすべき力

- ・基礎的な社会の知識
- ・情報を正しく読み取る読解力
- ・情報を素早く読み取り正誤性を分析する力

備考

資料の情報量はかなり多いが、何か新しい情報を与えてくるタイプではなく、科目知識が十分にあれば、既知の情報ばかりの資料。グラフや表については、種類や内容ごとに、項目を比較するのが推移を見るのか、資料の意図に沿った見方をできるように慣れておくべき。

「60歳以上の割合」を示したグラフから、「60歳未満の割合」を考える必要もあるので、文章題で目に見えた数字しか使えないような機械的な練習の仕方ではなく、数字の意味を理解して計算に持ち込む力は必須。消去法で考えれば計算しなくても正解できるが、確信をもって答えを選ぶためには計算力が必要な問題。ただし、概算で済ませるような、計算慣れの先にある工夫ができれば速いうえに確実になるので理想的。

力の細分化

- 学校での基礎社会：与えられる情報量に対し、納得しながら読むための「基礎知識」
- 情報対応力
 - ・基礎的な知識を大前提として、与えられた資料の読み取りをする際に知識に沿わせる活用。
 - ・グラフの種類ごとの見方。(折れ線グラフは推移主体、など)
 - ・グラフ特有の「12000(単位：千人)」のようなケースの理解(1200万人)
 - ・厳密な計算と、概算の使い分けができるようになるほどの計算経験値。

名大附との違い

何よりも全問選択問題であるという点。記述力が直接求められることはないが、最終的に面接も突破しなければいけない分、しっかり表現できる力も持っていないと、最終的な合格にはたどり着かない可能性は高い。

名大附は、出題内容が科目の枠にとらわれないうえ、ほとんどが記述問題なので幅広い対策・練習が求められ、そのうえで検査Ⅱと検査Ⅲもある。

名大附の問題は、基本的にページをまたぐことはないが、県立中高一貫サンプル問題では資料がページをまたぐものもあり、ページをめくりながら情報量に対処する力は県立中高一貫では必要になる。

また、今回のサンプル問題だけについていえば、名大附に見られる科目にとらわれない内容でその場で考えるような問題はなく、確実な学力をもとにして与えられた情報を乗り越える力の方が求められている。

今後の学習対応

まずは確実な基礎力と、大量の情報を確実に処理していく練習が求められる。

副教科の出題があるのかは分からないが、日常の学校生活の中で確実に身につけることが、通知表対策にもなるので学校での学びは大切にしよう。

全問選択式問題であるメリットは、選択肢があることで求められる解答の方向性がわかり、記述式問題のように問題の意図が読み取れず、意図と違う解答をしてしまう心配が少ないこと。一方で、選択式問題は選択肢も問題文の一部として正しく読み取らなければならないため、より多くの情報を早く正確に読み取る読解力が求められる。さらに、問題によっては資料だけでページをまたぐものもあるため、ページをめくりながら資料を読み取るなど、多くの情報を整理する力も必要となる。今回のサンプル問題からもわかるとおり、適性検査は教科の基礎知識があるだけでは正答を導き出せない問題が多く、基礎知識を活用できるレベルまで習得する必要がある。日々の学習でも、一問一答のように知識を正確に理解しただけを目的とせず、得た知識を活用するイメージを持ちながら学ぶことが大切である。

他県の公立中高一貫校との比較

自治体によっては、1問1問が独立している検査もあるが、1テーマで多方面に掘り下げるタイプ。大量の情報を正確に読み取り取捨選択する能力は必須。

首都圏の公立中高一貫ほどの難易度はなく、今回のサンプル問題はかなり基礎の確実さに左右される内容に寄っているように感じられるが、自治体によっては後半に差の付く難易度の問題を出題するところもあるので、基礎から応用まで対応できる力はつけておくべきと考えて対策していく必要がある。



明和中学受験専門

河合塾グループ

受験明和中

名古屋市千種区東山通五丁目65番地 A2E 地下鉄東山公園駅すぐ